



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ジャック・マリタンの「キリスト教的造形芸術」概念
Author(s)	高岡, 尚
Citation	基督教学, 4, 58-61
Issue Date	1969-07-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46243
Type	journal article
File Information	4_58-61.pdf



ジャック・マリタンの「キリスト教的造形芸術」概念

高岡 尙

スコラ存在論に基づく「詩的洞察」概念と、カトリック神学に基づく「義化論」の双方を同時に両立し得る事実の主張として認めるならば、ドガ、アングル以前とそれ以後において、「キリスト教的造形芸術」概念が変化せざるを得ないのではないか。

Frontières de la poésie et autres essais (1935) より Creative Intuition in Art and Poetry (1952) までの発表の間、マリタンは右の結論に到達しているものと考えられる。但し、「詩的洞察」概念を、第二次大戦後の米国を中心とする造形芸術運動の作品群にマリタン自身が適用する意図をもっているか否かは、文献から察する限り明瞭でない。

(1) 十九世紀後半以後の造形芸術は、形、色、空間、とその相互作用関係のうちに関心をとどめる。聖トマス、神学大全 I-II, 27, 1 ad 3、及び I, 5, 4 ad 1、に示唆されている如く、人間認識活動の中で、“Intuitio”を許されている唯一の領域 “res sensibiles quæ sensibiles”の中に、全ての営みの場を見出す。“Intuitio”は、一箇の “res sensibilis” のうちに、又同時に、無数の “res sensibiles” 相互の連関事実の中に、“quæ sensibiles”として存在そのものの属性 “unum” “verum” “bonum” を顕視する。この認識は、フロイ德的、生理的無意識に対立して存在する、理性的無意識の領域で実現する。この領域では、“Species impressa Intellectus”, “Intel-

lectus passivus”, “Intellectus agens”, が “sensationes”, “appetitus”, “emotiones” と一體の動態を形成する。この認識活動が “per modum abstractionis” ではなく “Intuitio” である以上、認識対象は、理性が構成する “esse intentionale” それに働きかける “intellectus illuminans” “appetitus” になつて、そのまま再現される。この認識方法は、聖トーマスの “scientia per modum connaturalitatis” であり、更にそうであるが故に “scientia per modum recipientis” である。当然の帰結として、かかる認識は、認識主体自身による自身の認識活動、自己主体の追求と明確化の営み以外の何ものでないことが言われ得る。これを「詩的洞察」と名付ける。

(2) エレミヤ書三十一章、三十一～三十四節。エゼキエル書三十六章、二十六節。テイト書三章、三～七節。ロマ書八章、二～四節。に適用されるカトリック神学的解釈。及び、トレント公会議義化に関する議定。

Cap. 7. Quid sit iustificatio impii, et quae eius causae.

Hanc dispositionem seu praeparationem iustificatio

ipsa consequitur, quae non est sola peccatorum remissio, sed et sanctificatio et renovatio interioris hominis per voluntariam susceptionem gratiae et donorum, unde homo ex iniusto fit iustus et ex inimico amicus, ut sit heres secundum spem vitae aeternae. — Denum unica formalis causa est, iustitia Dei, non qua ipse iustus est, sed qua nos iustos facit, quae videlicet ab eo donati renovamur spiritu mentis nostrae, et non modo reputamur, sed vere iusti nominamur, et sumus, —

Can. II. Si quis dixerit, homines iustificari vel sola imputatione iustitiae Christi, vel sola peccatorum remissione, exclusa gratia et caritate, quae in cordibus eorum per Spiritum Sanctum diffundatur atque illis inhaereat, aut etiam gratiam, qua iustificamur, esse tantum favorem Dei: — (13. Jan. 1547).

に基づき、義化にあつては、人間本性それ自身が、事実上、かつ真実の意味で、存在的義化を蒙ることが認められる。

(3) カトリック教會的義化思想と詩的洞察が結びつくべき一九世紀後半以後、それまで存在しなかった新し

いキリスト教的造形芸術概念が生まれる。原始キリスト教時代から中世社会崩壊までとはより、文芸復興・バロックから一九世紀半ばまでの創作者主体の自己自覚の時代においても、作品それ自体が作者主体を自然の一側面を表出する事が不可能であった。作品は、文学的、哲学的、宗教的、抽象概念の一表現法であるに止った。たとえ、傍発的洞察の側面が存在していても、表現手段の優秀さに還元された。このような時代にキリスト教的造形芸術と名付けることが出来る作品は、題材、標題が明らかにキリスト教教義内容から取材されたものであった。しかし、一九世紀後半以来の造形芸術にあつては標題、抽象的思想内容、即ち、形、色、空間、光、等の感覚的直観の対象以外の要素が、何ら作品構成に形相的要因とならなくなった。“res sensibles quā sensibles”の“intuitio”の中に反映する謎めいた自己の内面、その謎めいた自己の内面に反映する限りでの“res sensibles quā sensibles”の“intuitio”これが作品活動の全てである。自然世界と交流を持つかぎりでの作者主体そのものが作品活動の全過程、及び作品の形相を構成する時代にあ

つては、キリスト教教義という理念的標題を基本的形相とするキリスト教造形芸術概念に固執する事は、作者が真に芸術的態度を採る事をのぞむ限り、作者にとつて致命的損失であらうと考えられる。義化は、真実の意味で人間の罪を赦すのみならず、人間精神の存在的救済をも行なうというカトリック伝説の考え方。つまり、キリストの救済力は、超自然的秩序への人間本性の高揚と同時に、人間存在構造機構の本来化をもたらすという義化論的立場に立つて「詩的洞察」を見直すならば、

① 標題、題材がキリスト教信仰の表現であるが故にキリスト教的造形芸術と呼ばれうる作品。

② 義化を受けた創作者の人間性から生み出されたものであるが故にキリスト教的造形芸術と呼ばれうる作品という区別が可能となる。

キリスト教という事実はマリタンにおいては、義化の事実と同一視される。キリスト教的標題内容になりうる啓示そのものは、義化の事実に関する説明であり、キリスト教という事実ではなく、言語による一解釈の爲の符号に過ぎない。

従って、十九世紀後半以後にあつては自ら真の造形芸術に忠実であろうとする瞬間、作者は同時に全き意味において、キリスト教的造形を営んでいるのである。

一個の芸術家主体が救済の範囲に自己を置くとき、義化は思想でもなければ、ただの期待でもない。存在論的事実であり。新しい神の法における真の自由が、実際に復興したという事実である。

少なくとも、「詩的洞察」概念が適用可能な造形活動に関する限り、(ハンス・ホフマンを指導者として起つた米国の新しい造形活動以後に関しては、適用可能性が明らかでない) 作者は、キリスト教的作品を創造したいという意図をもつことは出来ない。あくまで、「詩的洞察」に忠実であり、「詩的洞察」に生きることが必須条件として要求される。その作品が、義化された人間本性から出るものである限り、恩恵の痕が作品に反映される。何故なら、その作品規定に参加した主体、即ち理性、自由意志、身体条件、生活史、技術の一切が義化の事実を受けているからである。かかる意味において考えられる「キリスト教的造形芸術」は、その性質上、美術史学

的類型としての「キリスト教造形芸術」という一ジャンルを構成しない。